

事件5 「最初の事件」

1

そのビルは、ウエストミンスター、セント・ジェームズ地区の古い街並みに紛れて、ひっそりと佇んでいた。

周囲の建物と比べても、特別目立った所はない。だが、一度屋内に入れば、勘の良い者なら気付いただろう。そのビルの中が、不自然なほど「静かな」ことに。

《ディオゲネス・クラブ》。

ロンドンに数あるメンバーズクラブのひとつだ。ただ、そのよくあるクラブのひとつが、イギリス共和国のシヤドワ・キャビネット閣内閣と呼ばれる秘密情報機関であることを知るのは、国内外のごくわずかな人間だけだった。

アーサー・ホームズは独り、その《ディオゲネス・クラブ》を訪問した。

ここに来るのは久しぶりだ。《クラブ》の作法として、訪問者は建物内での沈黙を求められる。《沈黙館》という別称の所以だった。アーサーは受け付けて手続きを済ませ「呼び出し」のメモを手渡すと、案内も受けずに訪問客用の応接室——建物内で唯一会話が許される部屋へと足を向けた。

ドアを開けて、中に入る。

だが、先客がいた。呼び出しのメモはいま渡したばかりだが、アーサーの動向はあらかじめ伝わっていたらしい。元より、自分が彼女たちの手のひらの上にいることなど、アーサーも自覚している。

「……やあ。久しぶり、姉さん」

白々しい口振りで言うのと、部屋の奥で窓を背に座っていた二人の女性が立ち上がった。

「ようこそ、アーサー。私たちの可愛い弟。貴方に会えて嬉しいわ」

「ご機嫌よう、アーサー。私たちの愛しい弟。変わりないようで、何よりです」

同じ声のトーン、同じ口振りで紡がれる言葉が、アーサーの左右の耳をくすぐった。静かで平淡な響きの声なのに、そこに込められた濃密な愛情が匂い立つようだ。

二人の女性は、どちらも表情が乏しいという特徴を除いても、瓜二つだった。整った美貌はもちろん、背の高さや体格も同じなら、その身を包むケープやドレスも同じ。唯一違うのは、髪の毛の長さだけだ。片方は短く、片方は長い。

髪の毛の短い、双子の姉、ルイーザ・ホームズ。

髪の毛の長い、双子の妹、ジーン・ホームズ。

アーサーの二人の姉であり、《ディオゲネス・クラブ》の創始者にして管理者たちだ。

「生憎『変わり』があつたから、ここに来たんだ。当然、もう知つてるだろ？」

姉たちが支配する《ディオゲネス・クラブ》は、ロンドンの裏側に隠されている「秘密」の殿堂だ。ここには、政府や政府以外の様々な機関から、入手し得る限りの情報が集まってくる。そのほとんどすべてに、姉たちは目を通してはるはずだった。余計な説明は迂遠なだけである。

もつともーこれもいつものことだがー姉たちは弟との会話を楽しみたがった。

「相変わらずせっかちですね、アーサー。久しぶりに姉弟水入らずだというのに」

「そうですね。『変わり』と言うなら、アーサー。貴方、少し痩せたでしょう。四ポンドーいえ、五ポンドかしら？」

「……四・五ポンドほどだ」

「まあ。また食事をサボつてるのですね。いけない子だわ」

「今日もまだ何も食べてないようですよ？ 同居人がいなくなると、たちまちこうなんですわ
ら」

弟を責めつつも、その声と視線からは煮詰めたジヤムのような偏愛が滴っている。アーサーは苛々と部屋の中を行き来した。

「……その同居人のことだ。彼ーコナン・ワトソンが二日前に突然姿を眩ました。一応、翌日には電報が届いたがね。大学の教授の依頼で、渡仏に同行することになった。しばらく帰れない、と。ずいぶんお粗末なアリバイ作りだよ」

「それでも確認はしたのでしょうか？」

「コナンの指導教授の一人が、しばらくフランスに滞在することになったのは事実のようだ。その教授が彼に同行を依頼したかは不明だがね」

「何故確認しないのですか？」

「なに？ しかし、その教授はすでにロンドンを出てー」

「滞在場所は調べればわかるはず。電報のひとつも打てば、すぐに確認できることですわ。少なくとも、その教授がどこまで『この件』に関わっているのか推測する手掛かりは得られるでしょう」

「……………」

思わず口をつぐむと、姉ールイズは「まあ、アーサー」と弟のミスを咎めるように、優しく名を呼んだ。

もう一人の姉、ジーンが口を開ける。

「曖昧で不確かな事実より、『嘘』はずっと重要な判断材料です。その『嘘』がどの程度の強度を持っているのか、どの程度の時間と労力、代価を掛けて作られているかは、大切な『情報』

ですから」

「ちなみに、件の教授は確かに学生を同行させているようですよ。ヴィクトリア駅で目撃されました。彼が『嘘』に関わっているなら、本当に生徒を連れて行く必要はない。多分利用されているだけね」

「つまりこの『嘘』は、『教授が学生を連れていた』という証言ですぐに補強される強度を持っているけど、教授が『それはコナン・ワトソンではない』と発言すれば壊れてしまう強度しかない」

「ただ、その教授はバリに入ったあと、すぐにナルボンヌとニームに向かう予定なのです。とすると、イギリスからの電報を受け取って返信するまでには、時間がかかるでしょう」

「なら、この『嘘』を付いた『嘘つき』さんの狙いは、教授の返信が届くまでの時間稼ぎ」

「また、私たちが把握しているコナン・ワトソンの人物像だと、教授の渡仏を利用することを、とつさに思いつくようには思えない。彼のために『嘘』を用意した第三者の存在が濃厚です」
姉たちは詩を紡ぐかのように、不思議な抑揚で弟に説明した。

アーサーは「第三者ね」と、姉たちの態度を注視する。そして、懐から破れた紙を取り出し、二人の姉に突きつけた。

「……心当たりは？」

「郵送物の包み紙かしら。宛先はベーカー街222Bのコナン・ワトソン」

「それに、アルファベットのJ。ファミリー・ネームがないけど、差出人のイニシャルと考えるのが妥当でしょうね」

「とぼけるつもりか？ 郵便を受け取ったミス・ハドソンの話だと、包みは薄く、固い手応えながら、ごく軽量だったらしい。そして、このサイズ。何が入っていたか、想像は付く」

アーサーはそう言うと、改めて二人の姉を正面から見据えた。

はつきり言って、ほとんどあらゆる点で自分を上回る能力の持ち主たちだ。だが、それでも彼女たちは、彼女たちなりの基準で「公正」である。

「仮面の殺人集団、『ジャック・ザ・ナイトメア』の情報が欲しい。奴らと敵対する、『教授』プロフェッサーモリアーティと彼の組織に関する情報も。それから……コナンの安否について」

アーサーは眼光を鋭くする。

「姉さんたちは連中と、どこまで結びついている？ コナンの失踪にも関与してるのか？」

アーサーの詰問に、ルイーズとジーンは無言で互いに視線を交わした。

「やはり予想通りのようね、ジーン」

「ええ、ルイーズ。それにしても、こんなに真正直に斬り込んでくるなんて」

姉たちの言いように、アーサーはピクリと眉を動かす。だが、口答えはしなかった。

確かに「これ」は「デーオゲネス・クラブ」の主に向かって、なんの見返りも圧力も取り引きもなく、ただ回答を要求するなど、その価値を知る者たちからすれば許しがたい愚行かもしれない。アーサーも彼女らに発明品を提供しているが、彼女たちの握る情報の「価値」に比べれば見合わないだろう。弟が姉に「甘えて」と断じられても仕方がない状況だった。

しかし、裏社会で対立する二つの組織と姉たちの間に何らかの関わりがあり、その結果として弟の同居人に害が及んだのだとすれば、アーサーには事情の説明を求める権利がある。少なくとも、それが姉たちの「公正さ」のはずだった。

「……姉さんたちが以前からピッチャード・ロイロット博士をマークしていたことは知っている。そのおこぼれで、彼のブリタニア時代の論文まで手に入ってたんだしな。それに、あのメリーウェザー老。こっちは事件のあと調べてわかったが、彼は『デーオゲネス・クラブ』の創設時から、政治的、資金的バックアップを続けて来てくれた有力な後援者だった。そんな二人の事件を姉さんたちが把握していないわけがないし、もっと言えば介入がなかったとも言えない。ロジャー・ステイプルトンにせよ、どれだけ世間の目を避けようと、ロンドンに出戻って来た元ブリタニア貴族を『デーオゲネス・クラブ』が見逃していたはずがないんだ。もっとも、注目したのは彼が暴走し出してからか——あるいは、もうひとつの『ナイトメア』が動き出してからかもしれないな」

いずれにせよ、姉たちが無関係だということだけはあり得ない。

特に『ジャック・ザ・ナイトメア』だ。巷間で話題に上っている点は逆に「らしくない」が、彼らの実態は、明確な敵を想定し、特殊な訓練を受けた暗殺集団である。あれだけ統制のとれた集団がロンドンを跋扈しているなら、姉たちが関知していないはずがなかった。彼らの仮面が入っていたのだろう郵送物の包み紙を持って来たのも、姉たちがより深く関わっているのは『ジャック・ザ・ナイトメア』だと推測したからだった。

果たして、姉たちは穏やかに肩を竦めて見せた。

「あの自動機巧人形アウトマタは危ないから手出しして欲しくないんですけど、言っても聞かないんですよね」

「ともあれ、そこまでお勉強して来たのなら、少しお話ししましょうか。どんな話題であれ、貴方との会話は私たちの喜びです」

姉たちの返答に、アーサーはいよいよ表情を引き締める。

対して、姉たちはごく淡々と切り出した。

「今回の件ですが、事の発端は十年前です」

「十年だと？ そんなに古いのか？」

「はい。革命暦八九年。この年に、現在『教授』プロフェッサーとして知られる人物が、初めてロンドンに

現れました」

「彼は瞬く間にロンドンの暗黒街で台頭し、わずか半年余りで表の社会をも操るほどの影響力を發揮します。それを可能にしたのは、彼が持つ不思議な『力』でした」

「……《ギアス》か」

「ええ、そうです。アーサー。貴方は《ギアス》について、どの程度理解を？」

「……相手と目を合わせることで効果を發揮する、極めて強力な催眠術」

「表層的には正確な分析ですね。しかし、本質的には誤った理解です」

あっさりと落第点を出されたが、姉が相手ではいつものことだ。

アーサーは黙って姉の言葉の続きを待つ。

姉は頷き、

「《ギアス》とは、他者の精神――思考や記憶、五感、あるいは魂に干渉する、『強制力』とでも呼ぶべき力です」

「それも、科学の及ばぬ、言わば超常現象に類する力。その使い手は過去の記録の中に希に登場していますが、観測された例は全体のごく一部でしょう」

「見世物じみた伝聞もあれば、権力の中枢に現れた形跡もある。時に徒に、けれど時に危険な意図を持って、人類社会に関与してきたと考えられます」

「また、個々の《ギアス》は異なる性質、あるいは『機能』を持つらしく、強力な『強制力』を伴うという共通点こそあれ、発生する効果には大きな個体差が見受けられます」

「総じて、多くは謎のままです。《ギアス》も、それを操る者に関しても」

「……………」

姉たちの語る話に、アーサーは我知らず脂汗を浮かべていた。話のスケールが、漠然と感じていた予感を上回っている。

「……発生する効果が違うと言ったな？ なら、モリアーティの《ギアス》は、どんな機能を持つているんだ？」

「推測はしているでしょう？ 当人の秘めた欲望を呼び覚まし、増幅させる効果があるようです。また、そのことによつて対象の人格を一変させます」

「同時に、対象の、これまで發揮できていなかった才能も呼び起こすようです。身体能力も向上する傾向があります。ただ、対象の個人差によつて『変化』にはかなり差が出るようです」

「そう言う意味では、本来かなり不安定な力のはずなのですが……彼の《ギアス》によつて変化した者たちは、皆一様に精神的に強くなる。人格的強度とでも呼ぶべきものが跳ね上がるのです」

「それまで良くも悪くも『無害』だった人物が、突然、無視することができない存在感を持つ

ようになります。しかも、闇の才覚に目覚めることで、社会秩序から逸脱する方向に向かうことが多い」

「……まるで悪党製造機だな」

「言い得て妙ですね。そして、ほとんどの対象者は、与えられた変化を『解放』と捉え、彼に感謝や恩義を感じています。《ギアス》を受けた者の多くが彼に協力的なのは、このためです」
「彼自身、一種のカリスマ性の持ち主ですし、人心掌握に長けていますからね。また、単に個人を籠絡する技術だけではなく、『組織』を率いる経験も積んでいると見て間違いないでしょう」
姉たちの評価に、アーサーも頷く。ここしばらくはずっとモリアーティと彼の組織を探っていたが、裏社会における彼の影響力たるや、他に類を見ないものだ。

「組織の経験……たとえば、《ギアス嚮団》か？」

そう尋ねたのは、深い意図があったわけではない。単に姉の言葉から連想し、思い出したただけだ。

しかし、姉たちの反応は鋭かった。二人は瞬時に顔を向け、氷柱の如き眼差しで、射貫くようにアーサーを見据えた。

「……そう言えば貴方は、彼と直接会っていたのでしたね……」

「……その言葉は彼から聞いたのですか？ だとすれば、私たちは愚かにも、彼の戦略的判断力を高く評価し過ぎていた可能性が出て来ます……」

姉たちから感じる「庄」が跳ね上がっていた。

アーサーは鼻白みつつ、

「……モリアーティから聞いたのは、『嚮団』という言葉だけだ。それに……確か『森羅万象にアクセスする《コード》保持者』と言っていたな。もつとも、あのときはまるで理解できなかった。《ギアス嚮団》の名を聞いたのは、ロイロット博士の妻、ヘレン・ロイロットからだよ。モリアーティは、かつて《ギアス嚮団》で『嚮主』の片腕にまで上り詰めた、と」

「『嚮主』の片腕？ 私たちが知り得た情報とは、重なりつつズレる内容です。つまり、異なる視点から見た『事実』である可能性が高い。それに《コード》保持者ですか。なるほど、興味深い」

「それよりも『教授』プロフェッサーです。戯れに口にしたとしても、悪戯が過ぎます」

「彼の基本方針はホームズ家との直接的対立を避けることだと見なしていましたが、こうなるとアーサーへの接触と警告も、真意は誘導であると考えるべきかもしれませんね」

「この子の好奇心を低く見積もっていました。反省すべきですね」

静かなやり取りの中に、張り詰めた緊張感があった。だが、これが二人の本来の姿だ。ホームズ家の双子は――弟が絡まない限り――『沈黙館の魔女』と各国の諜報部に恐れられる存在

なのである。

「……要するに、モリアーティという男は、それなりに長い歴史を持つオカルト集団の出身者であり、《ギアス》なる超常的な強制力を操ることができるってことだな？　そして、本人の言っていた通り、見た目よりはかなり年を食っているらしい」

アーサーが口を挟むと、姉たちは会話を中断して弟に目を向けた。

「その通りです。そしてひとつ情報を追加すれば、彼は自らの意志で所属していた組織と決別しました。彼がロンドンに現れたのは、彼が組織を出奔したからです」

「そんなことまでわかってるってことは、《ディオゲネス・クラブ》は《ギアス嚮団》とも接点があるんだな？　いったいどんな組織なんだ」

「嘘は吐いていませんよ。『多くは謎のまま』です」

「なら、少ない方の『わかったこと』だけでいい」

アーサーが重ねて尋ねると、姉たちは仕方ないと言いたげに小さく息を吐いた。

「簡潔に言えば、ヨーロッパを中心に世界各地で活動するカルト集団と言うことになるでしょう。その歴史は古く、少なくともローマ帝国時代には、その原型が存在していたと見られています」

「……今度はローマ帝国と来たか……」

「基本的に《ギアス》の究明に身を尽くす、世間から隔絶した集団のようです。《教授》のプロフィールのように表の社会に干渉することは、少ないように見受けられます」

「ただ、影響力がないわけではありません。むしろ逆です。いざ《嚮団》が明確な意思を持つて動けば、誇張ではなく歴史が動きます」

「実際、彼らの介入で世界情勢の流れが変わったと推測できる事例は、両手の指の数では足りません」

「そんな連中と、よく接触できたな。もつとも、歴史を変えてきたって点では、《クラブ》も似たようなものか。何にせよ、《クラブ》と《嚮団》の間に、敵対関係はないんだな？」

「ええ。外交と呼べるものはほとんどありませんが、互いに不可侵、不干渉。ある意味、友好的な共存関係が築けていると自負しています。少なくとも、現時点では」

「私たちもナイーブな時期に差し掛かっています。彼らが介入『しない』ことは、次世代の政治体制を構築する上で、非常に重要なファクターでした」

次世代の政治体制という言葉に、アーサーが反応する。

「……いつか言ってた、E・U・構想か」

いまから百年前に起きた市民革命によって、欧州における王侯貴族による支配体制は崩壊した。以後各国はなし崩し的に民主主義国家への道を進んだが、その成長に翳りが見えるように

なつて久しい。各国の国力は、徐々に衰退へと向かいつつあるのが実情だ。

この状況を打破すべく、イギリス政府が「イーそして《ディオゲネス・クラブ》が「他国首脳部と交渉を進めてきたのが、各国を「自治州」として欧州全域を一国家と見なす、連邦制の導入である。この大胆極まりない複数国家の「一大文明圏の再構成案こそが、E. U. 構想。《ユーロピア共和国連合》の設立だった。

「はい。すでに見通しは立っています。来年「イー革命百周年の節目に合わせ、フランス政府から大々的に発表される予定です。もともと、実現までには、まださらに時間がかかりそうですが」

「それでも、成長著しい神聖ブリタニア帝国に対抗するためには、避けては通れない最低限の備えでしょう。構想実現が滞るようなら、欧州は四半世紀の内に、彼らの属領、植民地エリアになります」

予言者の如き姉の台詞に、アーサーは息を呑む。正直、大袈裟だと思うが……彼女たちが言うなら「そう」なのだ。

自国が隣国の「イー」それも、かつては自分たちを支配していた貴族たちの属領になるかもしれないという未来。しかも、その未来を遠ざけるためには、《ギアス嚮団》の不干渉が不可欠だと言う。

だとすれば……。

「……《嚮団》と決別して来たモリアーティの扱いは、政治的にもデリケート……ということか」

探るように問うアーサーに、「ええ」と姉も慎重に返答する。

「話を戻しましょうか。さつき教えた通り、彼は瞬く間にロンドンの暗黒街に確固たる地位を築きました。ですが、それ故に当局の強い警戒を呼びました。要するに目立ちすぎたのです」

「組織から出たばかりの彼は、まだそうした社会の力学に疎かったでしょう。このときに彼を仕留めることが出来ていれば理想だったのですが」

「いま言っても仕方ありません。ともあれ、自らの急激な活動が政府の反発を招いたと判断した彼は、一度組織を休止させ、自らも潜伏することを選びます」

「……ロンドンを出たのか？」

「不明です。彼が活動を再開したのは、七年後の革命暦九六年。今度は彼なりにロンドンに『根付く』方策を整えたのでしょう。いまの彼の組織の在り様も、その一端だと思われれます」

「ただ、便宜上『組織』と呼称していますが、その実体は、彼の《ギアス》を受けた者たち「彼らの言葉を借りれば《解放者》たちの、個別の繋がり、緩やかな連帯に過ぎません」

「中枢には彼と数名の幹部がいますが、他の者たちは集団としてまとまってすらいない。たと

え道ですれ違っても、互いが《解放者》であることを知らぬ者が大半でしょう」

「……幹部か」

それが、メリーウエザーの屋敷に現れたインタビュアーや大男かもしれない。それに、手紙のやり取りー情報交換が頻繁に行われていたらしいクロエ・ノートンも、幹部かそれに近い立場にあったに違いない。何しろ「高弟」と呼ばれていたぐらいだ。

「当然、そうした集団の脅威は、厳格に統率され組織化された集団に劣りますが……『個人主義的犯罪者たちの私的連合』と捉えると、対処が難しいのも事実です。実体が見えず、全容が把握できない」

「しかも個々を結ぶ関係性が《ギアス》によるものとなれば、組織の解明は極めて困難です。

彼は見事に『根を張った』

「故に、私たちは緊急的な対処として、彼が張った根が『芽吹いた』際に、これを『刈り取る』手段を用意しました」

「……その『手段』が《ジャック・ザ・ナイトメア》？」

「はい」

「もつとも、その呼称はマスコミによるものですが」

アーサーの確認を、姉たちは率直に認めた。彼女たちの口から直接語られる《ジャック・ザ・ナイトメア》の実体に、アーサーは生唾を飲む。

「……じゃあやはり、《ジャック・ザ・ナイトメア》を率いているのは、姉さんたちなんだな？」

「いいえ。正確には違います。《ジャック・ザ・ナイトメア》を直接指揮しているのは、私たちではありません」

「私たちは、《教授プロフェッサー》という脅威に対抗する組織ー部隊トウチを、発案し支援しただけです」

「……裏からお膳立てだけ整える、いつものやり口ってわけか」

「貴方も理解したはずです。彼の扱いは、政治的にもデリケートだ、と」

要するに、《ギアス嚮団》と不可侵、不干渉の関係上、《ディオゲネス・クラブ》が直接手を下すのは憚れるということだ。

だからこそ、《ジャック・ザ・ナイトメア》という「秘密」部隊が必要だったのである。

「……なら、コナンに仮面を送りつけたのは？」

「私たちは関知していません」

「私たちの方針は、一度たりともぶれたことはありません」

姉たちの言う「方針」とは、アーサーに関することだろう。二人の姉は、自分たちの仕事に弟が関わることを良しとしない。常に、可能な限り遠ざけるよう動いている。アーサーの同居人であるコナンに《ジャック・ザ・ナイトメア》の仮面を送るような真似はしないという彼女

たちの言葉には、一定の信頼が置けた。

だが、だとすると……。

「……モリアーティの罫という線も考えられるが、彼はこの件に関わるなど、こちらに警告をしている。姉さんたちの言う通り、あの警告が実際は『誘い』だった可能性もあるがー彼の真意を疑うより先に、確認しておくべき人間がいるな」

そう言つて、アーサーは二人の姉を強く見据えた。

「《ジャック・ザ・ナイトメア》の指揮官に連絡を取ってくれ。コナンに仮面が送られた件について、心当たりを聞きたい」

二人の姉ではなかったとしても、《ジャック・ザ・ナイトメア》の指揮を取っている人物は存在するはずだ。《ディオゲネス・クラブ》の政治的支援、情報面でのバックアップを受けて動く、秘密部隊の指揮官が。

しかし、

「……残念ながら、現在彼と連絡を取ることはできません」

「なんだつて？ そんな言い分がー」

「事実です、アーサー」

「実情を言えば、ミスター・メリーウエザーに対する《教授》のアプローチは、私たちにとつても少なからぬ痛手となりました」

「彼の支援が失われたこともですが、それ以上に問題なのは、他の支援者や協力者たちにまで動揺が広がったことです。私たちは事態を憂慮し、かねてからの計画を繰り上げることを選択したのです」

「計画？ それは？」

「無論ー」

「《教授》一党の殲滅です」

表情を変えずに告げる姉たちに、アーサーは、む、と顔を硬くする。

「本音を言えば、せめてあと半年調査を進めた上で実行に移りたかった」

「ですが、支援者たちの動揺を抑えるには、早急に『成果』を見せる必要がありました」

「言わば、彼らに対するパフォーマンスです」

「私たちは、仮に殲滅が難しいとしても、《教授》本人を仕留めるか、それに比肩する打撃を与えることは、現状でも十分可能だと判断しました」

「実際、あと数日の内に、そうなると推測しています」

「そのためにも、不意を突く効果を見込んで、即座に計画を実行したのです」

「ですから……」

「計画はすでに発動しています。現在《ジャック・ザ・ナイトメア》は作戦行動を取っています」

「よって連絡を取ることができません」

「正確には、こちらから通達することはできません、あちらが返答できない、また、返答する義務がない状況です」

「これは情報漏洩を阻止する上で、仕方がないことなのです」

「いまからでは私たちにも、どうすることもできません」

「すでに計画は、私たちの手を離れているのです」

姉たちが早口になり、その口数が増えた。希有なことだが、これは彼女たちがアーサーの要求に応えられないときに見せる「癖」だ。こういうとき、姉たちに「嘘」はない。つまり、これ以上彼女たちに何をどう嘆願したところで、意味はないということだった。

「……《嚮団》のことはいいのか？ いや、建前上、間に秘密部隊を挟んだことはわかったが、そんな形だけの理屈でー」

「その点は問題ありません。彼の扱いはデリケートではありますが……今回はクリアです」

姉の言い様に、アーサーはピクツと反応する。

あくまで、自分たちが直接手を下さねば問題ないと判断しているのだろうか？ それとも《ギアス嚮団》との間で、すでに取り引きがあるのか……だが、姉は外交はほとんどないと言っていた。なら、《ギアス嚮団》がモリアーティ暗殺を黙殺する「理由」が存在しているということだろうか？

「いや……そうか……」

脳裏に閃くのは、過去の例。「人が変わった」五名のーメリーウエザーを含めれば、計六名の人物だ。

仮にこの推理が正解なら、姉が「クリアだ」と言う意味も通る。

「……どうという人物なんだ？ 実際に部隊を預かっている《ジャック・ザ・ナイトメア》の指揮官は？」

「そうですね。彼は初めて私たちに接触したときから、自らのことを『ジャック』と名乗っていました。もちろん、現在の俗称とは、偶然の一致ですが」

「ジャック？ 本名……な訳はないか。だが、『私たちに接触した』ってことは、向こうから《クラブ》に？」

《ディオゲネス・クラブ》が情報機関であることを知る人間は限られる。正体を知る者のほとんどは《クラブ》側から接触してコネクションを作った者で、その逆は珍しい。

姉たちは、アーサーの懐疑に首肯した。

「優秀な人物です。彼もまた、《教授》プロフェッサーを追う理由を有しています」

「そして、危険な人物でもあります。もともと、だからこそ《教授》プロフェッサーを追う任に相応しいわけですが」

「……なるほど」

その優秀で危険な人物が、いま現在、殺人集団を率いて独自の判断で動いているのだ。まったくもって、ロンドンという魔都は、刺激には事欠かない都市だった。

ともあれ、姉たちの説明を聞いて、アーサーは自らの推理に手応えを感じた。

だが……。

「仮面を送ったのが《ジャック》の指揮官だと仮定しても、コナンに近づく理由がない……」
アーサーに対する牽制だろうか？ いや、違う。《ジャック・ザ・ナイトメア》がアーサーを脅威——もしくは邪魔だと判断する理由がない。実際、アーサーが彼らの行動を決定的に阻止したことは、これまで一度もないのだ。

なら、アーサーを通じて間接的に《ディオゲネス・クラブ》を牽制することが目的だろうか？ いや、これも違う。仮に《ディオゲネス・クラブ》が《ジャック・ザ・ナイトメア》に過度な干渉を行い——実際、姉たちならそうするはずだ——彼らがそれを疎ましく感じていたとしても、直ちに敵対行動に出るはずがない。

常識的に考えて、彼らにとつても《ディオゲネス・クラブ》の支援は不可欠なはずだ。第一、いくらアーサーの同居人とはいえ、コナンの身柄が姉たちへの牽制材料になるわけがないし、そう考えるほど《ジャック・ザ・ナイトメア》の指揮官が無能だとも思えない。

いっそ、別の第三者が介入しているという見方はどうだろう？ 全くあり得ないとは言いつれないが……その場合、どうしてコナンは仮面を受け取り、行方を眩ましたのかという疑問が残る。

「……そうだ。そもそも、あいつも……」

コナンの行動も解せないのだ。彼は《ギアス》を掛けられたわけではない。ただ仮面を受け取っただけだ。誰にも何も言わずに姿を消したのは、コナン自身の意志なのである。

しかし、なぜ？

一体、コナンに何があったというのか。

「……アーサー。私たちの可愛い弟」

姉の呼びかけに、アーサーは顔を上げた。

「貴方は《教授》と接触したあと、コナン・ワトソンには何も言わないまま、単独で行動してしまいましたね？」

「それは……」

モリアーティとの会話で、彼らと《ジャック・ザ・ナイトメア》の抗争が、どういうものか解ってきた。同時に、この件に姉たちが関与している可能性が濃厚になった。

アーサーは、すべてが明確にならない内に、家族が関わっていることを知られたくなかった。だから、コナンには詳しく説明しないまま、独りで調査し出したのである。

「同じです」

「え？」

「コナン・ワトソンもまた、貴方には何も告げないまま、独自に行動していたことが報告されています」

姉の台詞に、アーサーは目を見開く。

コナンは基本的にアーサーがこの手の事件に関わることをよく思っていなかった。当然、本人も興味がない。自分から首を突っ込んで行くわけがない。

だが、いま姉が嘘を吐いているとは、到底思えなかった。

何か訳があったのだ。コナンがアーサーに黙って、事件に関わろうとした訳が。

「なぜ彼がそうした行動を取ったのかは不明です。ですが……彼が失踪した理由も、根は同じだと推測されます」

「……………」

姉の台詞には、幾つかの示唆が含まれていた。

アーサーは無言で二人の姉を見つめる。

おそらく姉たちは、さらに核心に踏み込むような情報も握っているのだろう。だが、真に価値のある情報とは、多くの場合「未完成」だ。漠然として曖昧模糊とし、多くの者には理解することができないし、まるで異なる解釈をしてしまうこともある。扱いに長けた者の手で使わねば、自らを傷つける凶器となり得る。

そして姉たちは、アーサーの要望ではなく、力量を見定めた上で、情報を与えている。出し惜しみされていると思えば悔しいし苛立たいが、これは紛れもなく、彼女たちの「優しさ」だった。

実のところ、《ジャック・ザ・ナイトメア》のジャックなる人物については、どうしても確認しておきたいことが、ひとつだけ存在した。

しかし……いまの会話の流れでは、姉たちは質問しても答えないだろう。さもなくば、姉たちの方から情報を公開しているはずだ。すでに彼女たちは、アーサーのために最大限譲歩してくれた。

「……邪魔をしたな。それから……礼を言う」

目を逸らしながら小さく告げ、アーサーは二人に背中を向けて応接室をあとにした。

姉たちはアーサーの予想以上にーだが、内心の期待通りにー多くのことを教えてくれた。次は自分の番だ。

アーサーは名探偵などではない。だが、いまだ見えないが確かに存在するこの「事件」だけは、解決せねばならないだろう。

アーサーが、彼自身の意志で。

*

「ーと言うわけだ。レストレード警部。貴方が『ディオゲネス・クラブ』に報告したコナンの行動について、ただちに、洗い浚い、吐いてくれ」

スコットランド・ヤードの一室。ちょうど他に誰もいなかったので葉巻を吹かして寛いでいたクラウス・レストレードに、アーサーは真顔で詰め寄った。

クラウスは椅子から落ちそうになりながら、激しく咳き込む。

「まっ……待て、待て！ 落ち着け、アーサー。え？ な、なに？ クク、クラブ？ 俺は何も……」

「ふん。日頃の韜晦ぶりはどこに行った？ 不意打ちだと形無しだな。僕はターナさんじゃないぞ？」

「い、いや、だから、なんのことだか、さっぱり……」

「目が泳ぎ過ぎだ、警部。つくづくハプニングに弱いな」

脂汗を浮かべるクラウスを、アーサーは半眼でにらむ。

「ああでも、説明は足りなかったな。ひと言で言えば、心配は無用だ。警部が姉たちの依頼――まあ事実上の『命令』だと思うが、僕を監視して『クラブ』に逐一報告していたことは、すでに知っている。そして、僕が知っているという事実も、姉たちはとくに知っているだろう。全部承知の上で、監視役を任せているに違いない。よって、いまここで白状したところで裏切りへの報復は来ないし、警部の秘密の小遣い稼ぎが台無しになることもない」

「……え、ええと……その……」

「しつこいぞ警部。コナンの安否に関わる件だ」

ぴしゃりと言うと、クラウスは観念した様子で、大きく天を仰いだ。

「ああ、ったく！ いつから気付いてたんだ？」

「警部が僕のことを煙たがりつつ、なんだかんだと融通を利かせてくれるようになってからだ」

「いや、それっていつだよ？」

「だいぶ前だな。明確にいつというのは僕も覚えてないが、ずっと確信はあった。現に、僕が

自動機巧人形アウトマトを欲しがっていることも、姉たちには伝わっていたからな。そのことを知っているのは、コナンと銀助、それに警部だけだ」

アーサーがどうしても良さそうに言うと、クラウスは唸りながら、くしゃくしゃと髪を掻き乱した。

「まったく、なんなんだよ、もう……これでも結構、良心を痛めてたんだぞ？ ああ、まあ、いいや！ コナンの件だな？ 言っとくが、当人からも内密にしてくれって頼まれてたことだ」「了解した。何があつたか教えてくれ」

あくまで冷静に振る舞うアーサーに、クラウスは長々と息を吐く。

それから椅子の上で座り直し、改めて葉巻をくゆらせた。

「あれは確か、メリーウエザー氏の事件があつた、何日かあとだ。コナンが一人で俺を訪ねてきた。頼み事があるってな」

「それは？」

「ある未解決事件の記録が見たいと言ってきた。三年前の事件の」

「三年……って、まさか？」

「ハハ。もう察しが付いたのか？ さすがに鋭いな」

「……コナンが気に掛ける三年前の未解決事件など、ひとつしかない」

「まあ、その通りだ。あいつの兄貴が殺された事件の記録さ」

「なぜ、いまになって、そんなものを……」

「俺も同じ事を聞いたが、改めて向き合いたいとかなんとか、適当にはぐらかされたよ」

肩を疎めるクラウスに、アーサーは少しの間黙考する。すぐに察しが付いたとはいえ、ここでコナンの兄の事件が関わってくるとは想定外だった。

あの事件がコナンにとって、いまもまだ重大な意味を持っていることは知っている。だが、事件から三年が経過し、コナンの生活も当時とは大きく異なっているのだ。あまりにも、唐突過ぎる。

「……コナンは他に何か言っていなかったのか？ どんな些細なことでもいい」

「生憎、何も。探し出してきた記録を見せたのは、ちょうどお前等がロイロット博士とこの事件を調査してるときだったしな。あいつの兄貴の件についてちゃ、あまり話す余裕もなかった。

一応、相談があるなら乗るとは言ったが、大丈夫だって断られたぐらいだ」

クラウスはそう言うと、些か罰が悪そうに顔を逸らす。

「コナンが急にベーカー街を出たって話は耳にしているよ。すぐに、兄貴の件だってピンと来た。一人で調べたい事があるんだろうってな。ただ、口止めされてたもんだから、言い出しづらくてよ？ まあ、なんだ。そういうわけだから、あんまり心配しなくても大丈夫だと思うぜ？ む

しろ、そっとしておいてやる方がいいんじゃないか？」

クラウスはそう言って、葉巻をくわえたまま気楽に笑った。

アーサーは苛々と表情を険しくする。

「日頃韜晦してたって評価は取り消した。呑気なことを言ってる場合じゃない。コナンの失踪には、高確率で《ジャック・ザ・ナイトメア》が関わっている」

「はあっ？ 冗談は止せ。それとも……まさかあいつ、《ジャック》に殺されたとでもー！？」

「……その可能性がゼロとは言えないが、仮に殺害が目的なら、とっくにコナンの遺体が見つかっているはずだ。しかし、奴らはコナンに、仮面を送った」

「仮面って……《ジャック》が？ あいつらの仮面を、コナンに？」

「ああ。これまで遺体の側に仮面を残すことはあっても、相手に『送る』というパターンはなかった。少なくとも、確認されていない」

「つ、次はお前の番だっつて予告か？ コナンの奴、それで迷惑を掛けまいと……！？」

「……いや。確かに普通ならそう受け取る^{ヤード}ところだが、仮面を送る行為が殺害予告だとすれば、過去に予告を受けた者から、市警に助けを求めた前例があつて然るべきだ。だが、そんな報告はー」

「……一度もないな」

「とすると、殺害予告そのものが今回初めて行われたか、もしくは、別の意味があるか」

「別の？」

「……………」

アーサーは答えない。しばらく黙り込んだあと、「いずれにせよ……」と再び口を開けた。

「ターナさんの話だと、コナンが消えたのは彼女が目を離れたほんの十分少々の間。この間、誰かが部屋を訪れた形跡はない。コナンは自分から出て行ったと見るべきだろう。」

しかし、仮面を受け取ったからと言って、即座に姿を消すというのは、どう考えても不自然だ。手紙の類が同封していたとしても、それを読んだだけで、誰にも何も告げないまま姿を消すはずがない。考えられるのは……たとえば、仮面が最後のひと押しだった場合。奴らは、仮面を送る前にもコナンと接触していて、何らかの情報を提示していたんだとすれば……少なくとも納得は行く。

とすると、それはいつだ？ もちろん、あいつが一人で兄の事件を調べているときに決まっている。たとえば、調査の過程で《ジャック・ザ・ナイトメア》が事件に関与しているーその可能性があることが判明したなら……向こうの誘いに乗ったとしてもおかしくはない。そして、この仮説が『当たり』だとすれば、やはり姉さんの言う通り、鍵はコナンの兄が殺された事件……」

「お、おい？　アーサー？」

困惑するクラウスを余所に、アーサーはいつしか人差し指を立てて唇に当て、虚空をにらみながら、ぶつぶつとつぶやいていた。

アーサーの脳裏で、仮面を受け取ったときのコナンの姿が像を結ぶ。彼の、葛藤と決断。想像の中のコナンが、ゆっくりと仮面を付ける……。

「……警部。コナンに渡した事件の記録を、僕にも見せて欲しい」

「悪いが、あいつに渡して、そのままだ」

「なに？　写しはないのか？」

「三年前の事件だぞ？　そんな物あるわけがないだろ。ただ、俺も一応目は通したが、はっきり言って大した内容は書かれてない」

「詳しく」

「三年前、コナンの兄ジェームズ・ワトソンが、仕事の帰りに暴漢に襲われて命を落とした。死因は失血死で、凶器はナイフ状の刃物と見られてる。事件には目撃者がいるが……」

「コナン自身のことだな。以前、あいつから聞いた通りの内容だ」

「当然だ。何しろ、あいつの証言が、そのまま記録になってたみたいだからな」

「……なら、記録を見たところで新しい発見がないことは、コナンにもわかっていたはずだ。それでも確認せずにいらなかった。それも三年経ったいまになって。そこまで思い詰めた、きつかけはなんだ？」

コナンがクラウスに頼み事に来たのが、メリーウェザーの事件の数日後。あの事件がきっかけとなった可能性は高そうに思える。

しかし、あの一連の出来事の中に、コナンの兄に結びつくような何かがあっただろうか？　コナンはメリーウェザーとろくに会話していないし、モリアーティとも一瞬すれ違っただけだ。アーサーがモリアーティと空き部屋で話している最中はどうだろう？　だが、あるときモリアーティに同行していた幹部らしき二人にせよ、インタビュアーは広間に残っていたし、大男は部屋の外で控えていた。コナンと接触するタイミングがあったとは考えづらい。

「……くそ。情報が足りない……」

焦燥が胸を焦がし、苛立ちが思考を阻む。

手に入るのは曖昧な状況と不確かな可能性ばかりだ。確かな情報を収集し、可能性を必然性に変えて行かねばならないが……いまはその時間と労力が惜しい。

姉たちの計画は、すでに発動しているのだ。こうしている間にも、状況は変化しつつあるはずである。

「……なら、その変化の中から、見つけるしかない」

いまコナンはどこにいて、何をしているのか。また、これから何をしようとしているのか。

「早まるなよ、相棒」

いつもなら、その相棒が口にしそうな台詞をもらして、アーサーは部屋の窓から暮れゆくロンドンを見つめた。

*